



## 「教育の社会対応」 とは？

---

直江俊雄  
芸術学系講師

「『教育の社会対応』とは、一体どういう意味だろう？」(不勉強のためか)あまり聞き慣れない特集のタイトルのやや首を傾げながら前号を手にしたところ、それぞれの執筆者の多様な視点が面白く、一気に読んでしまいました。おそらく私の感じたところでは、すでに時代は教養か実学か、というような二者択一ではなく、学問追究から学生の教育、組織の運営といったあらゆる面で、大学の社会的貢献や連携といった視点が前提条件となっている、ということを示すものだったのではないのでしょうか。私たちの専門である「芸術」のような非実用的な分野であっても、「非実用」ゆえの必要性を自らに問いながら、また、社会に向かって、その意義を分かりやすく共有しようとする意識をもつことが求められていると思います。

執筆者の中には、ご自分が学生や新社会人だった頃の経験を発想の原点とされ

ていることが多いのも、印象に残りました。私自身がこの大学に学んでいた頃を思い出しますと、自由に関心のあることを追究できる環境には感謝していたものの、この大学都市の中に適応してしまったら、「外の」社会で動いている様々な人間的事象への感覚が摩耗してしまうのではないか、というような漠然とした危機感を、感じていたように思います。昨年より本学で教えるようになり、再び、私自身の社会的感覚の摩耗という恐怖と闘いながら仕事をしています。学生たちにも、社会の中で芸術がどのような役割を果たしうるか、という視点をもてるような教育を、と目指していますが、まだ試みは始めたばかりです。

しかし、教員も学生も、意図的に社会との交流を希求し続けなければならないという筑波大学の条件、いわば社会的連携への慢性的飢餓感のようなものは、むしろ教育の社会対応を積極的に考えていく上で、私たちを常に目覚めさせておいてくれる条件になりうるかも知れないと、今では感じています。我が大学の社会的貢献を真剣に考える前号の各論を読んで、改めてその感を強くしました。

(なおえとしお 芸術教育学)